大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

戴名世と『憂庵集』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011219

戴名世と『憂庵集』

大平桂一

はじめに

戴名世（1653-1712）字は田有、または褐夫、江南桐城の人。弱年にしてすでに古文家として名を成し、社会に対して批判的態度を貫いたため「狂士」と呼ばれた。塾師や地方官の幕僚として生計を立てていたが、康熙四十四年に順天郷試に応じて及第、挙人となった。翌年の会試には落第したが、康熙四十八年、会試に第一名で合格、殿試では第二名すなわち榜眼となり、翰林院編修を賜った。順調にいくかと思われたかれの人生であったが、康熙五十年、思わぬことから弾劾を受けることになった。その著『南山集』に不敬の辞があるとして収監されたのである。左都御史趙申喬の弾劾文に言う、「翰林院編修戴名世、妄りに文名を竊(ぬす)み、才を恃(たの)みて放蕩す。前に諸生爲りし時、私(ひそ)かに文集を刻し、口を肆(ほしいまま)にして游談し、是非を倒置し、語狂悖多く、一時の私見を逞しくし、不經にして道を亂すを爲す。今名世は異數を膺(う)け、巍科に叨列せらるるも、猶お前非を追悔して書板を焚削せず、此の似き狂誕の徒は、豈に濫りに清華に廁(お)くを容(ゆる)さんや。」『南山集』の不敬の辞とは、「弘光朝僞東宮后及黨禍紀略」を初めとする南明政権関係の文章であった。戴名世には明一代の歴史を個人で編纂しようという志があり、かねてから史料を収集していた。その中に崇禎帝の死んだと思われていた太子の事績、馬士英・阮大鋮ら清に降った明の大官らの劣行、南明亡命政権の末路など、清朝の忌諱に触れる内容が多かったのである。戴名世は康熙帝の文教政策が荘氏の明史案（康熙朝初頭）の頃に比して寛大に変化してきたと誤解しており、書簡・日記を書く時に慎重さを欠いていたことは否めない。

趙申喬が戴名世を告発したことに関しては、次のような噂がささやかれていた。「老輩の相傳うる所に據るに、戴諸生爲りしとき、古文を以って當世に重名を負う。趙極めてこれを推崇し、集を刻するに爲に序を作ることを請い、

戴これを諾す。未だ爲(つく)るに及ばずして京を出ず。趙待つに及ばず、乃ち自ら一文を作り、戴の名を用いて刊出す。戴其の事を知りて大いに詬(ののし)り、書を致して其の文を削去せんことを請う。一諸生を以って、才を恃みて公卿を干冒すること此の如くなれば、其の此れを以って罪を趙氏に開くこと知る可きなり。其の後戴は會試にて名榜首に列せられ、既に重名を負うを以って、士林咸な狀頭を以ってこれに屬す。殿試揭曉さるるに及び、乃ち趙の子熊詔の得る所と爲り、戴は抑えられて第二に居る。熊詔の才名は遠く戴に及ばず、當時頗る趙賄を以ってこれを得と謂う者有り。其の事甚だ秘せらるるも、趙人の其の事を發するを恐れ、乃ち特に戴を疏參し、藉りて以って私怨に報い、人口を箝制せんとす。」

これははるか後世の人周貞亮が家蔵の『南山先生文集』にしるした評語である。『戴名世集』の編者王樹民氏によると、前半の序文云々は信ずるに足らないが、後半の科挙の不正に関わる記述は信憑性が高いということである。とにかくたいした証拠もないのに戴名世は獄に繋がれ、康熙五十二年に北京で斬首された。

生前に刊行された戴名世の文集としては門人の尤雲鶚が編集した『南山集偶鈔』（不分巻康熙四十四年刊）が唯一のもので、清朝末期になって鈔本を加えた文集が数種類出版された。それらをまとめたものが、王樹民氏の『戴名世集』（1986年中華書局排印）である。その他『戴名世集』に収められなかった戴名世の手稿が『憂庵集』で、1962年安徽省博物館が購入し、翻刻・校訂を経て2002年３月に中華書局から『戴名世遺文集』として出版された。編校者は王樹民・韓明祥・韓自強の三氏で、『憂庵集』の他、蘇軾の「薄薄」詩跋、「孟庵公伝」、会試墨巻の「知者楽水」全章、「王孝子」詩からなり、「重訂戴南山先生年譜」を付してある。

今回紹介する『憂庵集』は、戴名世が進士に及第する一年前、康熙四十七年に、長い間に折に触れて書き溜めてきた雑文をまとめたもので、元々は二百条余りあったらしいのだが、現在では残欠している最後の一章を含め、百七十四条しか残っていない。編集者の一人韓自強氏によると、内容は、明史十八条、清史十八条、風俗人情二十七条、議論と文章論三十八条、商業・経済八条、花草樹木や自然現象五十一条、宗教やシャーマニズム十三条からなっ

ており、非常に多岐にわたっている。多岐にわたっているだけでなく、朝廷のプレスコードを意識して詩文を書いていた大部分の知識人とは異なり、戴名世は誰にも言い得ないこと、誰も気がつかぬことを大胆に表現する勇気を持っていた。まことに希有な存在であったと言えよう。以下に『憂庵集』から数条を選んで紹介し、『憂庵集』の一斑を窺ってみたいと思う。

序段

私は毎年旅に出る。移動中や旅篭ではなかなか本が読めないので、時々眠気がさしてくる前に、筆にまかせて一、二書きつけ、それを行李にしまっておくことが習慣になっている。その日人に講義したこと、ふだん見聞きしたこと、出来事に触発されて考えたことを書き綴ってきた。わずか数行ずつの原稿で順序もばらばら、うまい文章を書こうなどどは思わず、退屈しのぎにやっているだけなのだ。ものぐさな性格で整理もしなかったので、ずいぶん散逸してしまった。戊子（康熙四十七年）の春、古びた本をひっくり返していたところ、中から二百箇条が出てきたので、それを綴じて保存し、その後筆まかせに書き留めたことを付け加えていったのがこの原稿である。

この書きぶりはなにやら本朝の『徒然草』の序段によく似ている感じがする。「つれづれなるままに、日くらし、硯にむかひて、こころに移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」わりと軽い書き出しになっており、戴名世の誠実で率直な性格をうかがうことができる。

第一段

春鳴く鳥の中で、百舌は鳴き始めるのがやや遅れ、鳴き収めるのは最も早い。だからこそ百舌は天性の鳴き手といえる。黎明の頃、他の鳥たちに先んじて鳴き始め、ハイハイと鳴きやまないのは、きっと百舌に違いない。壬午の歳（康熙四十一年）、私は長干寺で受験勉強していた。境内は木々が繁茂し、様々な鳥が飛び交っていたが、百舌が一番多かった。わたしに慣れて来た百舌たちは、時々数歩以内のところに近づいて来るようになった。ある日、百舌の群れが鳴いていたところ、突然黄鸝（うぐいす）が登

場し、一声二声さえずると、あたりの鳥は水を打ったように静まり返った。しばらくすると百舌の群れは口と羽で黄鸝(うぐいす)を攻撃して追い出し、またもとのように鳴き出した。このことから、すべての鳥は自分の声音に自負を持っており、他の鳥の声音を嫉んでいるということがわかるのだ。およそ生きとし生けるものはこのような属性を持っているのだろう。

この一段は純粋な自然観察と見えるが、実はそうではない。「すべての鳥は自分の声音に自負を持っており、他の鳥の声音を嫉んでいるということがわかるのだ。およそ生きとし生けるものはこのような属性を持っているのだろう」とあるように、鳥同士の嫉妬から人間同士の嫉妬を連想しているのである。戴名世は自然界の出来事を必ず人間界の事象と結び付けて理解しようとする。その典型的な例は次の一段であろう。

第二段

私の門人で広陵の韓君が言った、「昔寺院で勉強していた時、ある日階下を散歩していると、草叢に二匹の蟷螂(かまきり)がいて、メスがオスを誘って交合していました。翌日やはり交合していたので、じっと観察すると、オスはすでに体の半分以上食べられてしまっていたのです。そこで他の蟷螂(かまきり)で追試験してみたところ、みな同じ結果が出ました。」韓君はため息をついて、「蟷螂(かまきり)と同じ輩がどの家にも棲みついています。ああ恐ろしい、ほんとに用心せねばなりません。」しかし、ある書物には「蟷螂(かまきり)のオスはメスを食べることがある」とあり、韓君の話と食い違うようだ。

この話は戴名世の実見談ではなく、門人の韓君の話を引用しているのだが、やはり蟷螂(かまきり)の交合を目撃したことから家庭内の蟷螂(かまきり)を連想するという展開になっている。戴名世は韓君の話を簡単に信ずるのでなく、逆の例を出して疑問を呈しており議論の公平を期そうとしているようにも思える。

第三段

海外の夷狄は額に刺青をする、歯を黒く染める、椎型の髷を結う、身体に刺青をする、といった習慣を持っており、中国では皆それを笑いものにしている。しかし中国の女にも身体を傷つけてまで化粧する習慣があり、野蛮人と変わらない。荘子に「天子の貴妃となる者は、耳輪の穴を開けず、鬢の毛を剃らない」(徳充符篇)とある。もしそうならば女が耳

輪をつける習慣はすでに周の末期に始まっていたとわかる。纏足はいつ始まったかわからない。古来美人を詠んだ詩には、しかめつら、笑顔、凛とした表情、眉目、歯並び、頬、腰、首、皮膚の光沢などが描写されているが、描写は足には及んでいない。おそらく当時はいわゆる弓歩などどいうものはなかったのだろう。毛嬙・西施は古今に美人の誉れ高いが、もし今の世に生まれたとしたら、きっと足が美貌の足を引っぱることになろう。ものごとは本来繰り返すうちに人々の嗜好にかなうようになり、人々に愛されることによって風俗習慣として完成するものなのだ。美醜に一定の標準などあろうか？

第三段は当時の女性の風俗、特に纏足の風習を批判したもので、なかなかめずらしい記述である。「ものごとは本来繰り返すうちに人々の嗜好にかなうようになり、人々に愛されることによって風俗習慣として完成するものなのだ。美醜に一定の標準などあろうか？」とあるように、戴名世は当時の士大夫としては例外的にさばけた女性観をもっていた。それは後に掲載する第六十九段・第七十段を見ても理解できる。

第三十六段

康熙年間、河南省のある州の富豪が地面を掘って池を造営していたところ、穴がぽっかり空き、矢が外に向かって発射されたので、古い墳墓とわかった。そこで草を縛って人形を作り、放たれてくる矢を受け止めたうえで、多人数を動員してなおも掘り進んだ。矢が尽きたので穴の中に入り、松明で中を照らすと、役所のお白州くらいの広さで、髭の濃い男が一人、王者の装束をつけそこに坐っていた。人夫たちはびっくりして妖怪とばかり思い込み、刀で切りかかり、首がスッパリ落ちた。その土地からは金・銀・銅器の類がよく出土し、白骨もしょっちゅう発見されているのだ。しばらくすると墓から墓碑銘が見つかり、なんとそこは曹操の墓であった。さっき殺したのが曹操とわかり、皆はその噂を聞きつけて快哉を叫んだ。私はそこの地名を記録し忘れた。他日人に尋ねてみよう。

この段は町の噂をそのまま記した形にはなっているが、おそらくは戴名世の創作である。曹操は死ぬ時の遺詔で、「天下は尚お未だ安定せざれば、未だ古

に遵うを得ず。葬畢らば皆服を除け。其の將兵の屯戍する者は、皆屯部を離るるを得ず。有司は各の乃の職を率いよ。斂するに時服を以ってし、金玉珍寳を藏すること無かれ」（『三国志』魏書武帝紀）と言っており、墓に入れる服装も「四箧（よんはこ）のみ」（『三国志』魏書武帝紀の裴松之注に引く魏書）とあることから、その墓は盗掘に遭わなかったか、遭っても何も発見されず噂にもならなかったと考えられる。「穴がぽっかり空き、矢が外に向かって発射されたので、古い墳墓とわかった」と言う記事は、『史記』の秦始皇帝本紀に見える、始皇帝の墳墓に関する記述「匠をして機弩矢を作らしめ、穿ちて近づく所の者有らば輒ちに之を射る」を参考に書かれたものであろう。

第五十九段

街道の管理のまずさでは北京にまさるものはない。糞便が道に積み上がり、その深さは一丈（3.2メートル）余り、雨ともなれば泥濘が脛まで達するが、泥濘の中味はすべて糞便である。晴れると塵芥で顔が覆われてしまうが、塵芥ももとをただせば糞便である。目で見るものすべては腐り果てたもの、鼻で嗅ぐものすべては汚れきったもの。人々は糞便の中に浸りきり、食事も睡眠もすべて糞便の中でする。糞ころがしが糞便を団子にまるめ、ムカデがいつも糞便を携帯しているのを笑う資格はない。このことだけでも北京に魅力など感じられないのに、多くの人々がこの地を離れたがらないのはなぜだろう。

この一段は現代の読者に一種のショックを与える。例えばはるか以前の宋代の首府汴京の街路が泥濘にあふれていたことは、王安石の詩「省中」に「大梁の春雪　滿城の泥、一馬常に落日を瞻つめつつ歸る」とあることから知られるが、まさか清代になっても帝国の中枢北京の街路がかくの如き衛生状態であったとは。戴名世の頃から少し時代は下るが、乾隆朝に二人の仲の悪い大臣がいた。一人は書家としても有名な劉墉、もう一人は国家予算よりも巨大な個人資産を持っていたとされる奸臣和珅である。「清乾隆の時、和珅國に當たり、權は一世を傾く。明の閹宦魏忠賢も亦た是を過ぎず。結黨營私し、道路に側目するも、朝士敢えて其の鋒に攖（ふ）れる莫し。時に諸城の劉文清公崇如（墉）百揆を總制するも、亦た以って其の燄を挫く無く、心に常にこれを銜む。癸未（乾隆二十八年1763）春首、偵（さぐ）りて和の召に應じて宮に入るを知

る。風雪の途に載ち、泥濘地に遍ねし。乃ち故(わざ)と敝衣を着けこれを路に迎う。和至るに、人をして刺を持つこと高く、前みて謁(まみえ)しめて曰く、中堂親(みずか)自ら府に過(よぎ)りて年を賀するも遇わず、今輿より降れりと。和法(すべ)無くして轎を下り、寒暄せんと欲するに比びて劉は已に地に跪いて賀を與う。和急ぎてこれに答え、玄裘綉襖、已に汚穢身に滿つ。哭して宮闈に訴うるも劉を奈何(いかん)ともする莫し。」(『清朝野史大顴』〔三〕清人逸事巻六) このエピソードも、「糞便が道に積み上がり、その深さは一丈 (3.2メートル) 余り、雨ともなれば泥濘が脛まで達するが、泥濘の中味はすべて糞便である」といった『憂庵集』の記事とつき合わせて読むと、よりリアルに情景を想像することができる。豪奢を極めたであろう和珅の衣裳が、糞便混じりの泥濘にまみれた光景はさぞかし見ものであったであろう。『憂庵集』はこのように魅力的なディテールにあふれているのである。このようなディテールは同時代人にしかわからないし、同時代人はそれを公言する勇気をもたない。戴名世はその種の勇気をあまりにたくさん持ち合わせていたのである。

第六十九段

大昔から女たちは物見遊山が好きだが、それにはわけがある。彼女たちは一年中部屋に閉じこもり、新しいことは何一つ見聞きするチャンスがない。気候が良くなり花が咲き誇ると、くさくさした気分を晴らそうとしてグループで遊山にでかける。もちろん息子は母といっしょ、夫は妻といっしょ、娘は父母といっしょに外出するのであって、古代の桑間陌上など、今日ではまったくありえない。近ごろ仏法が浸透し、人々が教義に深く固執してぬけだせなくなっている。特に女たちは仏を厚く信仰し、仏への信仰が僧侶への尊敬にとってかわり、僧侶と仏を同一視するに至った。女たちが寺に入って線香を焚く時に、往々にして好色な僧侶の視線を魅きつけてしまう。寺参りを無害な物見遊山と同列に扱ってはいけない。

第七十段

蘇州の女たちは物見遊山が大好きで、春秋の天気の良い日には念入りに化粧し、隊列をつくって外出する。虎丘、観音山、法螺庵、千尺雪、霊巌、花山といった名所には、女たちが雲集する。男女が入り交じり、肩

先が触れあってもまったく避けようとしない。男たちは美しい女がいればほめちぎるし、醜い女には聞こえよがしに嘲笑する。それを聞く人も全然気にかけない。花の盛りの時分には、女たちはたとえ私人の庭園であっても、所有者の名前もたずねず、扉をたたいて入り込み、回廊をぐるぐるまわって見物する。ひどい場合には座敷にずかずか上がって座り込んでしまい、そこで主人が客を接待していてもまったくおかまいなしだ。こんな習慣は他所にはない。江（本当は姜、同音なので書き間違えた。名は鰺、康熙四十三年吏部侍郎の職にあった）侍郎が浙江の督学だった時、私は彼の幕下で仕事をしていた。ある日、江侍郎といっしょに霊巌寺に遊山に出かけた折、役所のほうではあらかじめ小役人に命じて冷泉亭で一席設けさせていた。吾々は霊巌寺に着くとまず冷泉亭で茶を一服飲んだ後で寺に入った。しばらくして出てくると、冷泉亭は女数人に占拠され、侍女が居並んで茶を差し上げており、亭の横には数丁の輿が停まっていた。江侍郎の侍者たちはとがめ立てすることもできず、吾々一同は結局女の一団を避けて場所をかえて飲み直したのであった。

女性文化に関する章段をあげた。第六十九段は、通俗小説によく登場する好色な僧侶（『水滸伝』にも僧と既婚女性との密通が描かれている）に対する警戒を呼びかけたものである。戴名世は礼の規定によってなかなか外出できない女性に「彼女たちは一年中部屋に閉じこもり、新しいことは何一つ見聞きするチャンスがない」と同情を寄せているが、これは当時の男性としてはごくめずらしい見解である。さて問題は第七十段である。蘇州では、日常生活では家の中に閉じ込められている女性たちが、「春秋の天気の良い日」（おそらく春の清明節と秋の重陽の節句の前後であろう）に物見遊山に出かけ、名勝古跡や個人の家にずかずか上がりこんで庭の花を鑑賞するという特別な習慣を持っていた。この習慣についての記述はおそらく他には例がないのではないだろうか。おそらくは繁華な蘇州という土地柄と、春の清明節や秋の重陽の節句という非日常的な場が相互に働いてこのような習慣が形成されたのであろうが、当時の社会に対するわれわれの常識を覆すインパクトを持っている。

第百三十六段

文字の吉凶を気にする風潮は、今の世の中で頂点に達した感がある。まさに古今未曾有といえるだろう。科挙の答案から士大夫の書簡、応酬の文章に至るまで、なんでもかんでも縁起の良い言葉遣いで相手を喜ばせようと努める。その結果、古代人が作り上げた文字で、追放され使われなくなってしまったものは枚挙に暇がない。文字の意味を気にするだけでなく、文字の形にも神経をとがらせる。たとえば、「函」という字は、中に「了」が入っているが、現代人は「了」（終わるという意味になる）が不吉だというわけで、「了」を「羊」に変えてしまった。このように意味が通じなくなってしまった例は数多い。ある高級官僚が私に言ったことがある、「一人の同僚がいる。その人物は尚書なのだが、常々いっしょに仕事をしているので彼の性格は熟知している。書類を決裁する時、その中に衰、病、死、卒、休、廃、悲、哀、傷、嘆、罰、黜、兇、悪、噫、嘻、嗟吁、嗚呼などの不吉な文字を見かけるたびに、手で書類を押しやり後ずさりして、「見たらいかん！見たらいかん！」と言いながら、首を振り額にしわを寄せ、地面に向かって嘔吐し、喉から痰をしぼりだし、気分がよくなるまでしばらく続けるんだよ」彼は北京の出身で、出世を重ねて吏部尚書（人事院総裁）になった。

第百三十六段は当時の士大夫の内面を深くえぐった章段である。封建時代の士大夫が不吉な言葉を極端に恐れていたことは、口唱文芸の世界では常識である。近代の中国漫才界を代表する侯宝林の演目に「改行」（転職）というのがあり、漫才師が高級官僚の家に招かれて演ずる場面で、次のような会話がかわされる。

甲：その家で祝い事があると、家に来てなにかやってくれと寄席に話が来るんだ。

乙：そうか。

甲：家に入ったらまず字について尋ねなければならないんだ。

乙：えーっ！

甲：口にしてはいけない字があって、それを言っちゃいけないんだ。

乙：そうか、これが「忌字兒」（タブー）って言うやつだな。

甲：そうさ、タブーさ。

乙：うん、タブーか。

甲：ああ、旦那さんの名前を「官諱」って言うんだ。

乙：それは口に出せるのかい？

甲：だめさ。

乙：ほう、だめなのかい。

甲：そうさ、タブーだからね。

乙：ほう。

甲：「死」とか、「亡」とか、「殺」とか、「剮」（切り刻む）とか、みんな縁起が悪いから口に出来ないんだ。

乙：ほう、それも口に出来ないのか。

甲：そうさ。

乙：それじゃ漫才がやりにくいねぇ。（『侯宝林表演相声精品集』文化芸術出版社2003年刊）

とあるように、口唱文芸の世界において、封建時代の士大夫の縁起担ぎを物笑いの種にしているのは周知の事実なのだが、それを具体的に描写したのは戴名世が始めてなのではないか。最後の封建帝国である清朝において、文字の獄が頂点に達したのに平行して、文字の持つ意味や音に対する感覚が異常に鋭くなり、それこそ科挙の答案から書簡、及び役所の書類や個人の作る文章にいたるまで、一字をもゆるがせにせず吟味する気風が生じた。そのような世相に戴名世は大いに不満であり、なるべく率直に自分の考えを表明しようと努めていた。その彼自身が文網にかかって命を落としてしまったのは真に当然の結果であったと言えよう。

以上戴名世の『憂庵集』の中のいくつかの章段を見てきたが、同時代人が見落とすか意識的に避けていた事柄を大胆に筆にしていることがお分かりいただけたと思う。『憂庵集』を精密に読むことにより、我々がこれまで清朝の社会に対して漠然と抱いて来たイメージを大幅に修正することが可能になると思われる。